



写真3 ツバキ園 (南側斜面)

## 追記

アジサイの植え付け作業はボランティアの方々にも協力して頂いた。

\*学名は野生植物については Ylist [米倉浩司・梶田忠 (2003-)「GPlants 和名一学名インデックス」(YList <http://ylist.info>)]に準拠し、アジサイ類についてはコリンマレー図鑑 (アボック社)、その他園芸植物については広島市植物公園植物目録 (1994 年版) ほかを参考にした。

## 花の進化園 栽培メモ

山本昌生・大矢祐一郎・泉川康博

花の進化園は、熱帯スイレン温室からバラ園方面に向かう通路の両側を利用し、APG 分類体系に従い植物を植栽しているエリアである。科を代表する主な植物を植栽している。特に観賞価値の高い植物は、栽培方法を工夫してより魅力的に見せることができるようにしている。

今回、いくつかの植物について栽培上の知見が得られたので紹介する。

### 1. グロリオーサ (イヌサフラン科)

秋に掘り上げた球根 (塊茎) を約一か月、暗所で乾燥貯蔵し、二股の球根を分割した (写真 1)。分割することにより、それぞれの発芽部分から同時に発芽させることができた。最低 5°C の温室内で乾燥貯蔵すると 5 月ごろに発芽が確認できる。芽の大きさが 1~2cm の球根を定植した。定植時は発芽部分のみ土壤

内に埋めればよく、他の球根のように球根全体を埋める必要はない。発芽した球根は、約 5°C の種子貯蔵庫において冷蔵することにより、長期貯蔵できることがわかり、5 月、7 月、8 月と定植時期をずらすことにより 6 月から 11 月まで観賞可能となった (表)。ただし、夏までの長期間の冷蔵保存は球根の消耗を招き、定植数に比べて開花株数が減少するため、株間を通常の 20cm 程度から 15cm 程度にして対応したほうが良い。さらに定植から開花までに約 1 か月、さらに球根の養成に開花後約 1.5~2 か月間が必要であるため、連続して観賞するためにはいくつか別の場所を準備しておく必要がある。

### 2. コダチダリア (別名 皇帝ダリア) (キク科)

通常の栽培では開花時に 5~6m になり、巨大な支柱が必要となる。そこで、簡易な支柱でも支えられるよう開花時の高さを 4m 程度に抑えることを目的に栽培方法を検討した。栽培方法は広島市西区の広島大学広島工業高校に列植されているコダチダリアを調査・聞き取りし参考にした。まず植栽株数が多すぎて軟弱に育っていたため、2019 年 3 月に株間を約 1.6m になるように株を間引き約半数とした。さらに

表. グロリオーサの定植時期と開花日 (2020年)

日	5月			6月			7月			8月			9月			10月			11月			12月				
	8	15	25	8	15	25	5	14	25	5	15	25	5	15	25	5	15	25	5	15	25	5	15	25		
作業及び開花日		▼				○	○	○				○	○	○						◆						

▼: 植付 ○: 開花 ◆: 球根の掘り上げ

株元に十分な光が当たるようにし、太い茎のみを残して細い茎は除去した。6月中旬に約2mに成長した茎を地面から6~7節、60~70cmの位置で切り戻した(写真2)。切り戻し位置から複数の側枝が伸長した。太くて生育の良い側枝を2~3本選び、他の細い側枝は随時切除することにより茎の数を制限した。側枝の基部が弱く、2019年の栽培では7月の大雨により主幹から折れたので、側枝の生育に合わせて株の周りに4本の支柱を立てて、麻縄で支柱を囲い、株全体を支えた。支柱が目立つため、最初は1m程度の支柱としたが、茎が伸びるにつれて長い支柱を追加し、最後は約2mの支柱で支えた。蕾が成長すると茎の上部が重くなるため麻縄による支えでは、茎が折れる可能性があった。そこで、幅がある幹巻きテープを使用することにより安定して支えることができた。11月下旬~12月上旬の開花時には約4mとなり、想定した高さとなり、開花輪数も多かった(写真3)。なお、一部の株は比較のために7月中旬に同様に切り戻しをしたが、高さ2~2.5mほどで花数も少なかった。八重咲品種も同様に7月中旬に切り戻したが、節間が一重咲品種の約20cmと比べ八重咲品種は約12cmと短く、さらに成長が遅かったため、開花時には約2mと低く、12月に数輪開花したのみで降霜のため終了した。

### 3. ニトベギク (別名 皇帝ヒマワリ) (キク科)

花が少ない真冬に咲く大型の植物として2019年7月に植栽した。コダチダリア同様に細い茎は間引いて、太い茎を残した。草丈3m以上となり、11月上旬に開花し、暖冬の2019年は12月下旬まで花を見ることができたが、2020年は12月上旬に霜が降りたため、全体が変色し終了した。コダチダリアよりも寒さに強いという情報があったため、2019年は掘り上げずに越冬させたが翌年5月になっても芽が動かず、枯死を確認した。支柱については、茎が硬くしっかりしていたためほとんど必要なかった。開花時は花が上向きのため、真下からでは見づらいが、見応えがあるため入園者からは人気があった。冬の夜間開園時にも開花しており、ライトアップすることができた。

### 4. コロカシア ‘ブラックマジック’ (サトイモ科)

大型の観葉植物として、葉色が黒いコロカシア ‘ブラックマジック’を2019年7月に導入し、植栽した。寒さに弱いので11月に株を掘り上げ、中央の親株は処分して周りの子株を鉢に取り、最低温度5℃の育苗

温室で管理した。高温と水分を好む植物のため、あらかじめ黒色マルチフィルムを張り地温を上昇させた後、5月中旬に株間60~70cmで定植したところ、約1.5mに成長した(写真4)。夏にハスモンヨトウ、スズメガの食害があったため、殺虫剤により防除した。

### 5. ラナンキュラスのラックスシリーズ (キンポウゲ科)

宮崎県の綾園芸により育種されたラナンキュラス。従来のラナンキュラス園芸品種とヨーロッパ産野生種との交配品種で、スプレー咲きとなる(写真5)。露地栽培が可能で、開花期間が長く、夏の高温多湿にも耐えて掘り上げずに夏越しできるとの情報があり、2018年11月に綾園芸から導入し試作した。

送付された株は秋に1か月間冷蔵処理した株だったため、温室内では12月から咲き始めたが、露地植えでは3月上旬から4月下旬まで開花した。その後地上部は枯れたが、地下の球根が生存し夏越しした。マグノリア下の木陰で栽培し、乾燥を防ぐために適時灌水することにより夏越しさせ、秋に掘り上げて分球して植え付けた。増殖した品種もあったが、枯死していた品種もあり、生存率を上げるためには、開花終了後に鉢上げして涼しい場所で適宜灌水して極端な乾燥を防ぐことが望ましいと思われた。露地栽培の株は前回冷蔵した株に比べ、開花は遅くなり、3月下旬から4月下旬まで開花した。

### 栽培環境の改善

樹木が大きくなりバラ等の生育を妨げたり、眺望が悪くなったりしたためオオシマザクラ前のセンダン及び日本庭園への三差路付近斜面のアベマキを2019年9月6日に伐採した。オオシマザクラの手前が開き、翌年には非常に見やすくなった(写真6)。

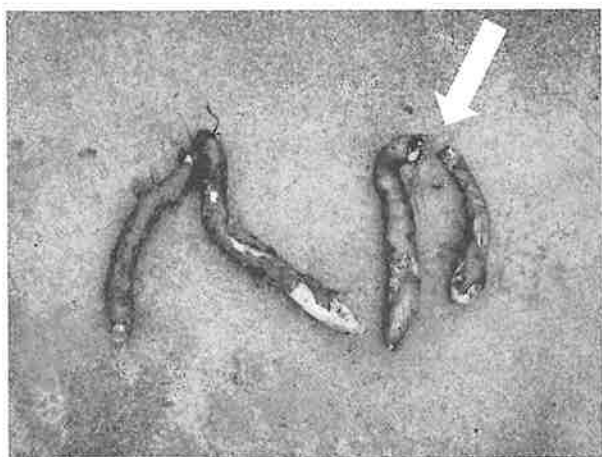


写真1 掘上げて分割前（左）と分割後（右）のグロリオーサの球根。矢印は分割部分。



写真2 6月中旬に切り戻したコダチダリア



写真3 約4mに成長し開花したコダチダリア



写真4 夏のブラックマジック



写真5 開花最盛期のランンキュラスのラックスシリーズ（4月中旬）



写真6 手前にあったセンダンの大木を伐採し、見えるようになったオオシマザクラ（右の木はチャンチンモドキ）